

人権感覚を更に磨く～「全国中学生人権作文コンテスト群馬県大会表彰式」に全校生徒参加～

毎年この時期に県内各郡市で順番に開かれている「全国中学生人権作文コンテスト群馬県大会表彰式」の順番が今年度は桐生市に回ってくることとなり、11月28日（水）の14：00から、桐生市市民文化会館小ホールで開催され、地元の中学校代表として中央中が選ばれ、全校生徒が参加しました。式典に続いて中央中のいじめ防止対策を発表する時間もあり、生徒会前本部役員を中心に学校の概要、生徒会の取組について説明し、「中央中いじめ防止4原則『ス・マ・イ・ル』」を会場の全員で唱和し、大きな拍手をいただきました。長時間に及ぶ表彰式への参加態度、発表に向けての準備と内容の充実度について、関係者の皆様からたくさんのお褒めの言葉をいただきました。全校生徒のみなさん、本当にお疲れ様でした。そして、生徒会本部役員のみなさん、ありがとうございました。



▲舞台上から会場を望む



▲プレゼン開始挨拶



▲4原則唱和①



▲4原則唱和②



▲4原則唱和③



▲発表者勢揃い

生徒会の発表に続いて校長訓話の時間をいただいたので、寺島は、以下のような話を行いました。

皆様こんにちは。入賞者の皆様、誠におめでとうございます。ご紹介いただきました寺島と申します。どうぞよろしくお願いたします。ただ今は、素晴らしい作文を朗読してくださいまして本当にありがとうございました。人権って大切なものなんだなということ改めて感じる事ができました。本校生徒の取組につきまして発表の場を与えていただいたことに対してもお礼を申し上げます。生徒会の諸君と同様、私も時間を頂戴することができましたので、人権に関わるお話をお伝えいたします。

じつは、中央中ではおととい全校集会を開いて人権講話を行いました。本日は、その第2弾ということで中央中の生徒に向けての講話という形をとらせていただきます。したがって、この後のお話の中で何回か「みなさん」という呼びかけの言葉を使わせていただきますが、それは中央中の生徒を指す、とお受け取りください。中央中以外の中学生の皆さん、引率の皆様、関係者の皆様にはその講話をお聞きいただくという形で進めさせていただきます。

さて、この仕事に携わって35年経ちますが、いまだに教育の奥深さに戸惑いを感じます。これまで「教育って何だろう、学校は何のためにあるのだろう」と、自分自身に問いかけながら教員を続けてきました。

35年間、その時その時の年齢や置かれた立場で「こうじゃないか、ああじゃないか」と自分なりにいろいろな仮説を立てて仕事と向き合ってきましたが、今は、こんなふうに思っています。

と言うのも、それは、特別難しいことでもなく、深いことでもない、ごく平凡な結論です。その結論とは「幸せ」です。「人は幸せになるために日々生きている」そして、「教育や学校も人を幸せにするためにある」と、今の私は考えているのです。

ですから、人を幸せにするはずの学校で命をおとしたり学校に行けなくなったりする児童や生徒の話の聞いたりすると、悲しくてやりきれない気持ちになります。

そして、そのような悲しいニュースに接するたびに、私は、「教育」という言葉に使われている「育」という漢字の訓読み「はぐくむ」が読まれているある有名な短歌を伝えたいという思いに駆られます。

ということで、今日は、その短歌をみなさんにお伝えしたいと思いますが、その前に、まず、「はぐくむ」という言葉がどこから来ているのか、その語源を確かめておきたいと思います。「はぐくむ」は、「羽くくむ」から来ていると言われています。「羽くくむ」とは、「羽でくくむ」、「羽で包む」、「羽で守り育てる」。つまりは、卵からかえった雛を親鳥がその羽で包み、外敵や寒さから守るという意味ですね。そこから、大切に育てる意味で使われるようになり、「育」の字があてられるようになりました。

その「はぐくむ」が使われている短歌とは、『万葉集』に載っている次の歌です。

やど 旅人の宿りせむ野に 霜降らば 吾が子羽くくめ 天の鶴群

訳はこうです（旅人が野宿をするであろう野に霜が降りたなら、私の代わりに息子をその羽で守っておくれ、空を飛ぶたくさんの鶴たちよ）

歌の背景についてご説明します。時は天平5年（西暦733年）、場所は大阪の港です。今まさに遣唐使を乗せた数隻の舟が中国に向かって出発しようとしています。それをたくさんの人が見送っています。この歌の作者は、その見送りの人々の中に一人、遣唐使である息子を見送る母親とされています。奈良時代の外国旅行です。今とは比べものにならないほど大変な旅でした。大切な息子の旅路を考えたら母親は、次のようなことを思います。寒空の下、夜を過ごす宿さえなく野宿をしいらね、寒さで凍えることがあるかもしれない。そんな時は、今、目の前の空を飛んでいき、たくさんの鶴たちよ、その羽で私の大切な息子を暖めておくれ。歌の中には「私に羽があれば、後をついていき、守ってあげたい」といった気持ちを読み取ることができます。それができない母は、その願いを鶴に託すというのです。和歌の技法で言うと、この歌の最後の言葉は「鶴群（たづむら）」という名詞で終わる体言止めになっています。体言止めの効果は余韻を残すことにあると言われていますが、そのねらいどおり、唐のほうに向かっ鶴が飛び続けるイメージを作り出すことに成功しています。ただし、飛び続ける鶴の姿を描きながら、その実、この作者が本当に描こうとしているのは、鶴に託して息子を守ろうとする母の親心なのです。

みなさんはこの歌を、どう受け取りましたでしょうか。この歌に初めて出会ったとき、私は、深い感銘を受けました。なぜならば、子を思う親の愛がこんなに深く、大きいということを知ることができたからです。そして、人は、一人ひとり、このよきな深い願い、深い思い、深い愛をもらって生まれ、育てられ、生きていくのを知ることができたからです。みなさんも、そのようなはぐくみがあったから、今ここにいます。はぐくみをくれたのはお母さんだけではありません。みなさんにかかわるたくさんの人たちからの愛情、希望、期待、思いや願いをもらって生きています。そして、それはみなさんだけではなく、世界中の人が、国籍に関係なく、性別に関係なく、年齢に関係なく、たくさんの愛情や希望、願いをもらって生きています。

さあみなさん、考えてください。人は誰でもいろいろな人からの愛や願いをたくさんもらって生きていくことを今確かめました。それを知りながら、それでも人を傷つけることができるのでしょうか。それでも人を差別することができるのでしょうか。それでも人を無視することができるのでしょうか。そして、それでも人をいじめることができるのでしょうか……

とは言え、みなさんも私も不完全な人間です。それでもなお、時として人とぶつかり対立して、むくむくと黒い思いがわき上がって来ることがあるかもしれません。でも、そんなときは、どうか今日ご紹介した短歌のように「はぐくむ」の由来を思い出し、考えてください。そうすると、あなたが傷つけようとしている目の前の人が、大切に包まれて成長してきたこと、そして、今もなお、見えない羽で守られて生きていくことが思い出されてきて、その黒い思いを抑えこむことができるはずです。

やど 旅人の宿りせむ野に 霜降らば 吾が子羽くくめ 天の鶴群

・ご清聴ありがとうございました。